

# 性相と形状の統一の意味の新しい理解: 統一思想の唯一論とヘーゲルの行動哲学

清心神学大学院大学校教授  
ファン・ジンズ

- I. 序論
- II. 性相と形状の統一の意味を把握する二つの方法
  1. 性相と形状の存在論的統一
  2. 性相と形状の指向的統一
- III. ヘーゲルの行動哲学: テーラー、マクドウェル、ピピン
- IV. 統一思想の唯一論: 世界を見る包括的方法

## I. 序論

統一原理と統一思想が性相と形状を説明する時、人間の心と体を代表的な例として説明する。原理講論では、「個人において心の命令が体全体に伝達され、体が 1 つの目的を持って行動する。」と説明されている。しかし、心と体の関係、それらがどのようにお互いに働くかは理解するのが非常に難しい。実際、この問題は歴史を通して絶え間ない哲学の問題であった。

このように心の領域と体の領域がどのような相関関係を結んでいるのかといういわゆる「心と体の問題」が、二元論(dualism)、一元論(monism)、観念論(idealism)、唯物論(materialism)、行動主義(behaviorism)、発生論(emergentism)など歴史上の様々な哲学学派の間で論争され、今日に至っている。しかし、満足な説明はなされておらず、「心と体の問題」の推し量れない深さが繰り返し確認されただけであるように思われる。

統一思想は性相について「神の性相は人間の心に相当する。それ故、本性相は神の心であり、すべての被造物の無形の機能的側面の根本的原因である。」と簡単に述べている。原理講論の説明も簡単すぎる。すなわち、「性相はすべての存在の内的性質であり、形状は内的性質に似たその外的な形である」と説明するだけである。

それは統一思想と原理講論の両方が歴史的な心と体の問題を克服することができる観点を持っていないことを意味するものではない。ただ、それらの説明が非常に簡略なので、性相と形状の関係が二元論的に理解される傾向になりやすい。1 つの例は次のようなものである。統一思想は原相構造の統一性を主張する一方で、実体の概念に関して、性相と形状を自動車の2つの部品に例えながら、自動車(人間)が実体であれば、部品(心と体)もまた実体であると主張する。これに関して、統一思想は性相と形状のそれぞれは独立した実体であると結論する。このような理解の仕方は典型的な心と体の二元論と考えることができるが、私はそれが統一思想の立場とは思わない。それ故、唯一論という性相と形状の統一の意味を首尾一貫したものとして理解するためには、より適切な説明の仕方が必要である。

このような点で、この論文の目的は性相と形状の統一についての新しい理解を提示することにある。人間の四位基台のそれぞれは分かれて存在することはできない。何であれ、存在するものは統一体として存在する。統一された存在とは二つの部分が合わさったものという意味では

なく、二つの調和した性質が互いに合わさっているという意味の「合性」である。すべての存在はその中の性相と形状がお互いに和合した存在であるという意味である。それ故、性相と形状の統一の概念は独立に存在している性相と形状がお互いと合わさるということではない。むしろ、互いに似た二つの不可分の性質である性相と形状の統一が常にすべての存在を維持していることを意味する。もし心的なことは純粋な性相の作用であると見、物理的なことは純粋な形状の作用であると見るならば、それは二元論になる。もし我々が統一思想の全体的な文脈をたどるならば、心的なことであれ、物理的なことであれ、すべては性相と形状が統一されたものであると理解しなければならない。

性相と形状は存在論的にはすでにお互いに統一されているが、人間は生涯を通して心と体の統一を追求しなければならない責任があるのも事実であり、それがこの論文が扱う主な課題である。それは人間が責任分担として人生で達成しなければならない価値に関係している。心と体が分裂しては、四位基台の構造の中で再び統合する我々の行動を絶えず反省することを通して、我々は神を中心とした人生の方向性をチェックしなければならないし、人生の真の価値を意識的に把握していかなければならない責任がある。それ故、我々は性相と形状の「存在論的統一」(ontological unity)と指向的統一(orientational unification)の両方を共に扱わなければならない。後者は人間が心情を成熟するのに必要である。本論文は性相と形状の存在論的統一と指向的統一のそれぞれの意味およびそれらの関係を明らかにしようとするものである。このような試みは統一思想の「唯一論」の拡張であるとみなしてもよいであろう。

## II. 性相と形状の統一を理解する二種類の方法

### 性相と形状の存在論的統一

上述したように、統一思想における性相と形状の関係にアプローチするのに二種類の方法がある。第一の方法は、性相と形状はどちらも一方から独立しては存在できないという事実に基づいて、性相と形状の相互補完的統一に焦点を合わせるものである。本論文ではこれを性相と形状の存在論的統一と呼ぶ。それはすべてのものが原相に似た「構造」から由来する。すべての個性真理体は、最小の粒子から最大の宇宙にいたるまで、内在的法則性を持ったエネルギー的存在であり、性相と形状の統一体である。これは例外なく普遍的な原理である。性相と形状の存在論的統一は存在するいかなるものにおいても「すでに」基礎となっている。

性相と形状の存在論的統一という点では、人間も例外ではありえない。統一思想は人間において性相と形状の関係は心と体の関係であると説明する。心は、認識、推測、反省、推理、想像などの心的出来事が起こる領域である。どのようなものであれ、心的なことが起きるためには、それに対応する物理的なことが必要である。いかなる心の出来事も感覚器官の作用、精巧な脳の作用、ホルモンの相互作用などの体の行動が伴わなければならない。すなわち、体の作用を離れては独立した心的出来事は起こり得ない。「人間のすべての活動や作用は二重的である。つまり、心理作用と生理作用が常に併行して働いているのである。」

もし独立した心的出来事(あるいは独立した物理的出来事)が可能だとすれば、心の作用の根源と体の作用の根源はお互いから分離して存在することができるという意味になる。もしそう

だとすれば、統一思想の唯一論を維持することが困難となり、一元的な観念論や一元的な唯物論が開かれることになる。しかし、心的な出来事であろうと、物理的な出来事であろうと、人間の生活のすべての瞬間は心と体の不可分で相互補完的な関係から現れるものである。それ故、統一思想は、純粋な唯心論や純粋な唯物論ではなく、統一論(唯一論)でこの世界を解釈すべきことを強調する。性相と形状の存在論的統一は人間の全てが根拠とする根本的な存在構造なのである。

事実、心と体の存在論的統一是我々に心と体の問題を解決する可能性と不可能性の両方を提供する。では最初に、不可能性の場合を考えてみよう。人生のあらゆる瞬間における「私」という存在は心と体の不可分の関係に根ざしているものであるから、「私」の心が心と体の関係を客観化しようとするときには、そのように分析しようとする心の働きにおける実際の心と体の関係は常に客観化の範囲から抜け出してしまふ。

しかし、存在論的統一によって、心と体の関係を把握することは「可能」でもある。もし心と体がいかなる共通基盤もなく独立した存在であるとすれば、それらは互いに永遠に知ることはできない「他者」のままであろう。このような二元論的な理解の方法は一つの極に基づいた観点が他を抱くいかなる可能性をも排除するので、心と体の関係は2つの平行線のまま存在し続けることになる。しかし、統一思想の唯一論によれば、心と体の関係は氷と水蒸気の関係に例えることができる。氷と水蒸気は2つの異なった現象であるが、それらは1つの同じもの、すなわち、 $H_2O$  という水である。この観点では、心と体は同じ存在の2つの異なる面と見ることができる。これは心にとって体を把握することはお互いを共有する瞬間に可能であるということである。

さて、哲学的難問としての心と体の問題は、性相と形状がお互いに存在論的に統一しているという事実に起因する。しかしながら、自己を知ることが可能と不可能に同時にする存在構造の深さに直面して、我々は不可知論や運命論のような否定的見解を取る必要はない。後で論じるように、性相と形状の存在論的統一は、まさに我々をして、心情が成長するように絶えず自分を反省するように導く原動力なのである。

### 性相と形状の指向的統一性

もし我々が心と体の存在論的統一にだけ焦点を当てるとすれば、日々の経験と相克するであろう。人間が心と体の間の多くの葛藤を経験することは真実である。洋の東西を問わず、歴史を通して、心の欲望と体の欲望の葛藤が人生に深く存在している事は否定しがたいことである。もし心と体が統一された生命に根ざしており、存在論的に不可分な関係を維持しているとしたら、なぜこのような葛藤や不均衡などが生じるのであろうか？すでに不可分となっている心と体が統一を追求しなければならないということは、何を意味するのだろうか？キリスト教における神の国に関する表現にあるように、心と体の統一の意味は「すでに」と「未だ」の両方を同時に含んでいるように思われる。

統一思想によれば、神は人間と愛の実体的関係を結びたいと願っておられた。それが神の「心情」に由来する創造の動機であった。神は人間を愛の生命に満ちたこの世界に生きる神の子供として創造され、人間を神の代わりに万物を主管する立場に置こうとされた。この点に関して、もし人間が神の意志が刻まれた神の愛の実体的対象に「自動的に」なるとすれば、神の愛

の本質の観点から見る時に、愛で満たされた存在であるためには充分ではない。愛の本質を考える時、愛は 1 人の個人のみによって実現することはできない。2 人の相対的な関係の中からのみ、愛は現れるのである。お互いに観点を自由に合わせ、自己のすべてをお互いに投入しながら、2 人が愛の真の喜びを十分な成熟のなかで共有することができるのである。それ故に、人間が神の子供として、神との実体的な愛の関係を成就するためには、自発的な努力によって神の水平線をつかむことができるに十分な程度に成長し、神の心情圏に入っていくことが人間の責任なのである。原理講論では、このようなプロセスを「間接主管圏」と呼ぶ。間接主管圏内にある人間の責任は、家庭、社会、世界において愛の生活を経験することによって神の心情と十分に共鳴する程度まで成長することである。

したがって人間は心と体の存在論的統一だけでは愛の理想を成就するのに充分ではない。父母、配偶者、子供、兄弟、姉妹、隣人、万物、そして霊界にいる人々を含む様々な関係を通して、現実の世界において心と体の不可欠の統一を実体化しなければならない。別の表現をすれば、人間はそのような他者との実体的な関係を通して、各自に内在している性相-形状の存在論的統一の意味を深く悟らなければならない責任がある。

神の創造目的はそれぞれが絶対的な神に似たユニークな個性真理体である被造物の中で、統一の実体的な過程の中で愛によって喜びを得ることである。人間は神に似せて創造されているので、同じ構造が適用される。すなわち、人間は他の存在と互いに喜びを分かち合うよう指向するようになっている。喜びは存在論的に統一された自己の深い意識に共鳴するからである。これこそ創造目的を中心とした理想的な人生に他ならない。このようにして人間は成熟した存在として神の真の愛をいっそう深く悟るようになるのである。

他者との外的関係は、無意識の統一状態にあった内在的な心と体の関係を、心のイメージと体のイメージに分けることによって、意識の対象として受け取ることができる意味ある契機を与えてくれる。他者との授受作用を通して、我々は自分の行動の仕方や話し方や考え方などを反省するようになり、それによって自分のすべての行動を内的(心的)な意図と外的(物理的)な行動の関係の結果と気づくようになる。さらにまた、このような自己反省のプロセスは他者に対して行動する新しい指向性を与えてくれる。性相と形状の存在論的統一に基づいて他者と一つになりたいと願う行動の方向性は、他者と円満な授受作用をするための土台となる。

この点で、内在的な性相-形状関係と外在的な性相-形状関係はお互いとの補完的關係をつくり、人生の指向性や方向性を二つの方法、すなわち他者との実質的な統一をなす方法と自己を完全に把握する方法を設定する。本論文ではこのような 2 つの方法の中に表される根本的な欲望を性相-形状の「指向的統一」と呼ぶ。

しかし上に述べたように、存在論的統一とは違って、指向的統一を自動的に成すことはできない。不断に自己の修養に努め、他者と真の愛で統一された関係を作るための努力を通してのみ、性相-形状の指向的統一、すなわち喜びの実りを味わうことができるのである。それは循環運動のようなものである。無意識の存在論的統一から指向的統一の欲望が生じ、また他者との円満な授受作用を通じた指向的統一の達成から存在論的統一の真の意味の意識的な把握が生じるのである。

### III, ヘーゲルの行動哲学: テーラー、マクドウェル、ピピン

このセクションでは性相と形状の存在論的および指向的統一の関係を理解する方法を支持するために、ヘーゲルの行動哲学を取り扱う。

チャールズ・テイラーの論文、「ヘーゲルと行動哲学」(Hegel and the Philosophy of Action (1983))は、人間行動の性質に関する現代の議論に対応して、ヘーゲルの行動哲学を再解釈することにおいて開拓者的な役割をしてきた。テイラーの重要な動機は、ドナルド・デービッドソン(Donald Davidson)が、行動の性質を心的な出来事と物的な出来事に関連づける際に二元論的傾向が見られることに対して反駁することであった。その傾向とは、行動と非行動を本質的に区別するものは何かをめぐって、独立した場所を特定できる心理的原因か、またはそれに対抗する可能性のある何らかの生理的原因かを、行動の合理的な説明を可能にする主要な源泉として区別しようとする傾向のことである。

これに対して、テイラーは行動の瞬間の不可分の関係を明らかにするヘーゲル哲学の「質的行動理論(Qualitative Theory of Action)」を提示した。この理論によれば、欲望、信念、意図、目的など別々の心的原因として知覚される傾向のあるものは行動から分離してはいない。何故なら、そのような心的なものは「行動を活気あるものにするものの中にのみ存在するか、もしくは、他のすべてのことが依存するようなこの目的の根本的な活性化は行動の中にあるからである。」この点は、上述したように、性相と形状の存在論的統一と共鳴する。

その場合、質問は、行動の目的や指示的意志が行動それ自体から分けられないとすれば、いかにしてそれを概念化するかということである。このような質問に対して、テイラーはほとんど修辭法的な言い方で、我々が決定的な方向に向かってなしていることの自覚そのものが我々の「業績」である。すなわち、行動の概念化はそれ自体が行動であり、その行動が目指すのは、それを具体的かつ明確にするための一層適切な媒介を具現化することである、と主張した。このような自己の行動の意味を行動そのものを通して把握するプロセスは、性相と形状の指向的統一のプロセスに例えることができる。

ロバート・ピピン(Robert Pippin)も、自意識の性質に対するヘーゲルのアプローチにおいてそれを中心的なモチーフと捉えたほどに、「業績」という言葉を深く探求している。ピピンのヘーゲル解釈としては、自己との関係としての自意識は、「心の眼を自己の内面へ向けてそれ自体を調べるようなものではない。」しかし、確かに、直ちに、または頑固に、そのようにしているように見える。むしろ、自意識は一種の心の姿勢であり、それ自身がもう一つの自意識と相互に認める中で達成しなければならないものである。そのプロセスでは必然的に、社会の分野や様々な媒介体を通じた人々との関係において実現することが要求されるのである。このような達成された心の姿勢は、それゆえに、ピピンによると、共同体的自意識の間の現実の関係の中から由来するものであり、その関係の中には内的な心と外的な現実の間の存在論的な境界は存在しない。自意識はそれ自体が行動であり、その行動は共同体の人々の相互関係的な行動だからである。

もし我々が自己の身体的動きを、自然界で起こるその他の運動のような「自然」現象と見、又、もしそれらの概念化が自然現象とはいかなる内的な関連も持たない「独自の自然発生」(sui generis spontaneity)と見るとすれば、同じ困難な問題が生じる。すなわち、いかなる基盤で自己の行動を決定的な方向性を持つ「意図的なもの」と呼ぶことができるかという問題である。

このような二元論的な理解においては、肉体の運動と心的意図との間の関係は正当化できないほどに密着しており、結果的に、我々の行動についての知識を構築する確かなものを与えてく

れる信条または信念の原因となるような概念の外にあるものを期待することになる。しかし、この期待を正当化できない理由は、与えられたものが普通に主体的な概念の領域を抱くことのできる能力があるとする単なる目前の信念に基づいているからである。しかし、与えられたものに単に依存するだけでは、困難に対処する弁明のできる近道を与えてはくれるけれども、それを正当化できる根拠と見なすことはできない。

このような矛盾を克服するために何よりも重要なことは、行動の規範的な状態に規範的に反応する自己意識を達成することができるという事実の中にある。もし意図と体の運動の間の規範的關係が単に与えられるものであるとすれば、我々は自己規律の理性的な存在としての人間の地位を維持することはできない。ヘーゲルの行動哲学は、人間を意図と行動の関係を超越的に把握することのできる理性的な存在であると見ている。人間が自己意識を持つことができるという事実はすでに心にも体にも還元することのできない超越的な存在であることを証明している。自己を把握する行動は既に心と体の不可分の関係を目指しているが故に、それは超越的なものである。

#### IV, 統一思想の唯一論:世界を見る包括的な方法

ヘーゲルの行動哲学は我々に統一思想における性相-形状の存在論的統一と指向的統一の現実を深く掘り下げる哲学的な枠組みを提供してくれる。テーラーの質的行動理論は本質的に心的出来事と物的出来事の双方を人生の瞬間とみる人間の行動に関する全体的な見解である。この点は、性相-形状の存在論的統一に例えることができる。すなわち、人生のあらゆる瞬間は、——心的なものであれ、物的なものであれ——性相-形状の不可分の関係によって現実化される。ピピンのいう他者との実質的な関係による自己意識の達成の概念は、人間は性相-形状の指向的統一の自己認識を達成しなければならないという見解と共鳴するものである。さらに、マクドウェルが克服しようとしたこと、すなわち、「与えられることの神話」は、もし我々が二元論的な見解に閉じ込められているならば、心と体の規範的な関係のための理性的な根拠を把握することができないことを意味する。なぜならば、二元論はすべてが単なる信念か単なる物に還元されるために、単に与えられるものだけを活用するようにさせるからである。

それ故、心と体の二元論を克服するためには、全人的人間が人生の瞬間を超越的に把握しなければならない。これに関して、私はヘーゲルの行動哲学が性相-形状の存在論的および指向的統一に関する議論を支持し豊かにすることができる哲学的源泉として働くものであることを主張するものである。

しかし、ヘーゲルの行動哲学には限界がある。自己意識の関係を通じた共同生活の究極的な目標、それをヘーゲルは観念論の境界の中で示してしているのであるが、それは理性が「絶対的に知る」状態に到達することにほかならない。なぜなら、それは理性の領域を人間が達成することのできる最高の価値であるとして大切なものとするからである。しかし統一思想によれば、性相-形状の存在論的及び指向的統一の概念が追求する根本的な価値は、理性の領域を含む心情の成長である。性相-形状の存在論的統一、すなわち全人間は存在論的統一と指向的統一が共鳴するひとつの地平線をなす程度まで真の愛の生活を成就するように指向しており、他者も同じように指向している。そのような統一された地平線では、神と人との関係が愛と生命で満

たされた心情文化となる。これがまさにヘーゲルの行動哲学が存在する理性の世界を越えるものである。

そのような限界にもかかわらず、ヘーゲルの行動哲学が心と体の統一の意味を新しい方法で把握するために活用すべき哲学的言語を提供していることも事実である。我々は必ずしも四位基台を、それぞれの位置を独立したものとして分離した仕方で理解する必要は無い。実際、現実には四位基台が存在論的に統一されている全体的な基盤の中に存在しているのである。このような存在構造において問題なのは行動の方向、すなわちそれが指向している究極的な目的である。実質的にまた認識的に神を中心とした性相-形状の存在論的統一と指向的統一の間の愛による十分な共鳴を達成するのは我々の責任である。このプロセスには人生の様々な段階での大変な努力を必要とする。すなわち、親、配偶者、子供、隣人、万物、その他との関係が調和しなければならないからである。